



## やっぱり『本』が好き

コロナ禍において自宅にいる時間が増えたことに比例して、自分の部屋にこれまでの倍のスピードで増えているものがある。本だ。部屋の書棚の本が、勝手に増殖してる？と疑いたくなるほど増えた。どこに行くにも人混みを避け、マスクを着用し、他人との距離に気をつかう現状では、自宅でゆっくりコーヒーを飲みながら好きな本を読んでいる時が何よりも寛げる時間になっているから仕方ない、とコロナ禍1年目は思っていたけれど、2年目も終わり3年目ともなると開き直っているわけにもいなくなってくる。収納は有限で、すでに書棚ではない場所に本の山が4つもあるからだ。読みたいけど置き場所が…と躊躇う気持ちが生まれ、自宅の窓から見えている書店からも足が遠のき、ついに電子書籍に手を出してしまった。

実は以前にも一度小説をまるっと一冊ダウンロードして読んでみたことがある。けれど、それはそれは読み難く全然集中できなかった。文字の大きさも画面の明るさも自由に設定することができ、本みたいに場所を取らないし、どんなに長い物語でも手荷物が重たくなならないという電子書籍の利点はもちろん理解しているけれど、片手でずっとスマホを支えもう片方の手で画面を送る、これがまず煩わしい。そして何より何度も何度も繰り返し画面を送る（ページをめくる）のが本当に面倒だ。紙媒体の本であれば見開きで800字くらい読めるはずなのに、スマホの画面で読みやすく文字の大きさを設定すると1ページにつき200~300字程度しか表示できずに集中してきたところ画面を送る羽目になる。そしてこれが本当に「電子無理！」となった要因なのだけれど、物理的にどの辺りで読んだのかが分からないから簡単に読み返したいページが探せないのだ。もともと集中して読めていないことも相俟って気になるページを読み返したいのに、途中で放りだしたくなってしまう。読書は私にとって娯楽であるはずなのに！

という前回の反省を活かして今回はマンガをダウンロードした。矯めつ眇めつキャラクターを眺める趣味はないし何より文字は少ない。しかし私は甘かった。全くもって小説以上に読み難かったのだ。

マンガは絵とセリフが一体となって物語を紡ぐ。ト書きによる状況説明や主人公の心の声を聞き、時には風景だけのコマで時間の経過を表したりしながら1枚のページが作られている。シーンに合わせて考えられたコマ割りのセンスや、吹き出しではなく余白に書かれた手書きの小さな呟きがストーリーに関係なく「くすっ」と笑えたりして、マンガにはマンガの、小説にはない楽しみ方がある。なのにこれまた電子書籍になると紙の本を読むようには楽しめないのだ。まずスマホの画面いっぱい1ページを表示すると登場人物の表情がよく見えない。そこでまた表示を大きくするのだけれど、右のコマから左のコマへとセリフを追いかけるために指先でも忙しく画面を移動させなければならなくなる。ページを俯瞰するとよく見えないし、コマを大きくすると操作が煩雑になってしまって、文字は少ないのに1冊読むのに時間と労力が多分に必要になった。なんということだ。

もしかしたら私が利用したプラットフォームが単純に使い難いだけだったのかもしれないけれど、やっぱり小説もマンガも全て紙媒体で読みたいと心から思った。部屋で本が増殖しているように思えても、借りた本が重たくて疲れてしまっても。大好きな本を手にとった時の幸せな重み、紙の感触、ハードカバーの装幀の美しさに思わずにっこりしてしまうこの高揚する気分は電子書籍では味わえない。ただ一点、電子書籍が羨ましいと思うのは店舗を構えた本屋さんではありえない金額の割引があることぐらいだろうか。それでも私は今月、大好きな小説の新刊をハードカバーで買うのを楽しみにしている。